

ゆかりの光明寺・自らの菩提寺である光禅寺・駒姫の悲話にまつわる専称寺、さらに義光山常念寺など多くの大寺院も城下町の周囲に建てられました。

3. 奥羽の関ヶ原合戦

1598年秀吉の死後、会津の上杉景勝と江戸の徳川家康の対立が深まりました。1600年におこった関ヶ原の合戦で徳川方が勝ったのは、山形の最上義光と岩出山の伊達政宗が、上杉軍と対戦し、これを釘づけしていたからでした。

Ⅲ 天下太平の世

1603(慶長8)年、徳川家康は、征夷大將軍となり、江戸に幕府を開きました。義光も政宗も幕府の傘下に入り、全日本に幕藩体制が形づくられてゆきました。

1. 義光と家臣たち

1601(慶長6)年義光は庄内から秋田県南をふくむ57万石の大大名となりました。義光は、家臣たちとともに、寺社の再建・領内の検地・最上川航路の開発・大学堰の完成につとめました。

2. 後継者たち

義光の後、山形藩は、家親・義俊(家信)がつぎましたが、家臣団の統率がとれず、1622(元和8)年幕府に領地を没収(改易)されました。家臣たちは四散しました。

3. 新しい秩序

1613年、伊達政宗は、支倉常長をローマ教会に派遣しました。しかし、常長が帰国した1620年、世は鎖国の方向へ進んでいました。

Ⅳ 障壁画の世界

安土・桃山時代から江戸時代初期にかけて、数多くつくられた城郭の中には、雄大な絵画がえがかれ障壁画の世界が開かれました。



▲すすきの図屏風

主な展示資料

斯波兼頼・伊達政宗・伊達忠宗・直江兼統ら画像。最上氏・伊達氏系図、支倉家家譜。最上氏時代山形城下絵図、大江氏時代寒河江城下絵図。義光外連歌巻、義康連歌懐紙。大般若経写経、一遍上人絵巻(遊行上人縁起絵)。伝勝軍地蔵菩薩。斯波兼頼・最上義光・お東ら遺品。北橋大学所用色々威胴丸(県文)。佩楯。銅狗犬(県文)ほか、最上氏奉納の武具、漆器、文箱、鉄鉢・鰐口・絵馬等工芸品、伊達氏の武具。南蛮屏風、島物茶碗、葡萄図屏風。扇面図屏風外仙台城・山形城・鶴岡城内障壁画。「鶏肋篇」(県文)、伊達輝宗「天正日記」ほか典籍・記録類。その他信長・秀吉・家康・義光・政宗・夫人・家臣らの書状・消息など。合計150点余

講演会(会場・本館講堂)

6月20日(土) 午後1時30分～午後3時

演題 「最上義光と伊達政宗」

講師 渡辺信夫氏(東北大学教授)

休館日 毎週月曜日

(6月8日、15日、22日、29日、7月6日)



博物館周辺山形市街略図

現在、霞城公園の東門は、大手門復原工事準備のため車輛通行できません。自家用車やタクシー・貸切バスなどご利用の方は、北門からお出入り下さい。

山形県立博物館 山形市霞城町1-8
TEL (0236) 45-1111

山形県立教育資料館 山形市緑町2-2-8
TEL (0236) 42-4397

義光と政宗

—その時代と文化—

昭和62年6月6日(土)～7月12日(日)

山形県立博物館

共催 蔵王・月山・朝日観光協議会、山形市観光協会
後援 NHK山形放送局、山形新聞
山形放送、山形テレビ

■ 開催にあたって

このたび、蔵王・月山・朝日観光協議会ならびに山形市観光協会との共催により、企画展「義光と政宗——その時代と文化——」を開催いたします。

伊達政宗についてはその生涯はよく知られておりますが、最上義光の実像はあまり知られてはおりません。むしろ、最近のテレビドラマで、ややゆがめられたイメージが茶の間に入ってきた感は否めません。

しかし置賜地区を除いた山形県一円、秋田県の一部まで領有し、57万石の大大名にまでなったのですから、並大抵の器量でないことは確かです。

今回の企画展は、義光・政宗個人にスポットを当てるだけでなく、彼らの生きた時代の文化を通して、その背景を浮き上がらせたいと思いました。その趣旨をお汲みとり戴ければ幸いと存じます。

最後に貴重な資料を快く出展して下さいました方がた、今回の開催に当りご協力を賜った方がたに心よりお礼を申し上げます。



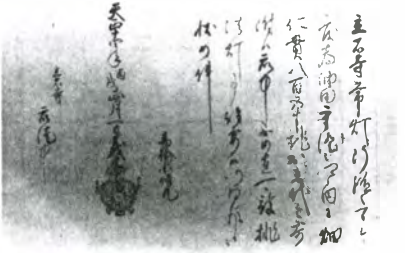
▶色々威胴丸

I 天下一めざして

山形の最上義光（1546～1614）と、米沢・岩出山・仙台の伊達政宗（1567～1636）が生きたのは、日本の歴史で中世から近世への転換の時期にあたります。

1545（天文14）年に、ポルトガル船が始めて九州に来航しました。そして、1639（寛永16）年にはポルトガル船の来航が禁止され、鎖国が完成した年です。義光と政宗の時代、それは日本の封建社会が世界に窓を開いた時に重なりあっているのです。

そのころ、人びとは、権力と財宝と名声を求めてきそいあいました。その目標は「天下一」でした。群雄にさきがけて京都に上った織田信長



（1534～82）は、「天下布武」の印章を用いて、天下一の勢いをしめしたのです。

1542（天文11）年から戦国の争乱が始まりました。伊達植宗と晴宗父子の対立がきっかけとなった「天文の乱」が奥羽の南半一帯を戦乱にまきこんだのです。

奥羽の南半では、山形の最上氏に対立した山形盆地の最上一族と庄内の武藤氏や、米沢～福島盆地の伊達氏に加え、会津盆地の芦名氏・宮城県北の大崎氏などが勢力をきそいあいました。

この戦国時代の末までにつくられた奥羽の戦国武将たちの代表的な城館に、陸奥の黒川（会津若松）・出羽の米沢と山形などがあります。

最上義光は1546（天文15）年に、山形城で誕生しました。25歳で最上氏をつぎ、1585（天正13）年までに、山形・新庄盆地を勢力下におきました。内陸盆地に本拠地をもつ最上氏の課題は、出羽の大動脈である最上川の全流域と酒田の港の確保でした。このため義光は、置賜の伊達氏・庄内の武藤氏、さらには横手の小野寺氏などとげしく対抗しました。

1588（天正16）年、南陽市と上山市の境あたりの中山口の政宗との対戦ははじめ、数多くの戦いが戦われました。1587年に

一たん征服した庄内も、伊達氏との和平のすぐ後、越後から反撃してきた武藤・本庄連合軍との、鶴岡市郊外の十五里ヶ原の戦いで取り返されてしまいました。

3. 政宗の進出

伊達政宗は、1567（永禄10）年に、米沢城で生まれました。18歳で伊達氏をつぎ置賜を治めました。母は、義光の妹の義姫（のちお東）です。

しかし、義光と政宗の二人の戦国大名は、伯父甥でありながら、最上川流域の支配をめぐる、ことごとに対立するように運命づけられていたのです。1588（天正16）年の上山市中山口での対決は、「お東」の命がけの説得でさけられた、と伝えられています。

最上氏との和平を背景に、政宗は翌1589（天正17）年、会津の芦名氏を破り、本拠を米沢から黒川に移しました。その支配地は、米沢盆地から福島県の中通りと会津におよび、その経済力が奥羽一の大大名にのし上りました。



最上義光

II 天下分け目の戦

1582（天正9）年に、「本能寺の変」がおきました。織田信長の後をついだのは、豊臣秀吉でした。秀吉は、1590（天正18）年に、関東に勢力をふるっていた小田原氏を滅ぼし、さらに会津の黒川まで進出しました。伊達政宗も最上義光も、秀吉の支配下に入り、全国は秀吉の手で統一されました。



▲長谷堂会戦図屏風(部分)

「信長の総大将でその後をついだ太閤は、自分にしがわらない者を一人も残さずすべてしたがえ、日本を意のままに平定し終ったのちに、まずシナを征服するために軍隊を高麗（朝鮮半島）に派遣した。」

と、イエズス会宣教師ジョアン＝ロドリゲスは『日本教会史』に書き残しました。

1. 奥羽の太閤検地

1590（天正18）年、会津に入った秀吉は、ただちに奥羽の検地を命じました。これまでの秀吉の検地は、征服地の領主たちの所有地については大目に見てきたのです。けれども、奥羽の検地はすっかり様子が違いました。

「納得しない者は、城主であれば城へ追いこめて、一人残らずで切りにせよ、百姓であれば一郷も二郷もことごとくで切りにせよ、村々が荒廃してもかまわない。」浅野長政にあてた有名な書状にみられる秀吉の決意は、奥羽の検地のはげしさを物語っています。

庄内では、はげしい検地反対の武士たちの一揆がありました。その中で奥羽の太閤検地は実施されてゆきました。太閤検地は、百姓を年貢の負担者にするとともに、百姓が実力では反抗できない社会をつくり出しました。

2. 大名義光と山形城下

1592（文禄1）年、秀吉は大明朝（当時の中国）を征服しようと、全国の大名に朝鮮半島への出兵を命じました。「文禄の役」です。

義光は、10隻の軍船を出すことを命じられた様子です。義光にあてた徴用船の日本海の港のフリーパスにあたる「過所」が、酒田の豪商二木家などに今も残っています。

義光自身も、半島への渡海基地である九州の名護屋に出陣しました。1593（文禄2）年に、現地から、山形城の改築と町割りの工事を指示した手紙を出しています。中世の小さな城下町だった山形は、このころに大きく面目を一新するのです。城下の中心八日町をはじめ多くの町が繁栄し、始祖斯波兼頼



▲山形城下図



▲山形城跡